
仕事をしよう

闇コロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仕事をしよう

【Nコード】

N4028S

【作者名】

閻コロ

【あらすじ】

珍しく

仕事をしようとする

聖徳太子

さてどうなる

(前書き)

連載小説抱えてんのに
書きちゃいました

だが

後悔はしていません

だって日和だもの

60●年

飛鳥時代

近所の子供以下と噂のイカオヤジこと

聖徳太子は今日もまたいつものブランコで遊んでいた

「ハーブの香り」

聖徳太子」

こんな飛鳥時代だから」

TONIGHT」

混じってる！

混じってる！

最早、何の曲だよ！

なんて作者の不毛なツツコミも太子に届くはずもなく、

太子はそれはそれは楽しそうに遊んでいた。

そこに朝廷内で……いやこの時代で

太子とまあともに話しが出来る数少ない人物、小野妹子が太子の
呼び出しを受けてやって来た

「おはようございます

どうしたんです？ 呼び出しなんて」

また今日もバカな話に付き合わされるのか……

なんて思いながら

妹子は挨拶する

「んー今日はちょっと相談があってなあ

ってか妹子、なんでそんなに離れてるんだ？」

「いえ、また落とし穴フラグかなあ……なんて」

「なんだよ！」

そんなに私が信用出来ないのか！」

「信用出来ないよ！前科あんだから！」

「私、これでも摂政　なのに………」

「摂政と言うからにはちゃんと仕事して下さいよ」

「それなんだよ

今日お前を呼び出した理由は

なあ妹子

最近私

あんま摂政っぽい事してない」

「ああ

ようやく気づきましたか………」

.....

「なんだよ!!」

そのリアクションは!!

もっと驚けよ!!

（「。□。」

って顔しろよ!!

いつもみたいに!!」

「五月蠅い!!」

黙れ!!」

妹子の強烈なツツコミ(?)により太子はとりあえず静かになる

「まあでも今回は自分でそれに気づけたのは良いことだと思いますよ」

「やっぱりそうだよなあ
んじゃ

これから摂政っぽい事するぞー」

「珍しくやる気ですね

それで何をするんですか?」

明日は空からお塩でも降るんじゃないか
なんて思いながら妹子が問う

「こんな事もあるのかとちゃんとノートに書いといたぞ」

太子はノートを取り出す

「確かにそれも大事ですけどそんなことする前にいつもサボってた分の仕事して下さいよ」

「うるさいな〜」

見せてやらんぞ」

「ハイハイ

それはそうと見せて下さいよ」

太子はしぶしぶ妹子にノートを渡す

「ありがとうございます

え〜何々

その1

カレー大会を開く

その2

素晴らしい日常のポエムを書く

.....

その3

素敵な恋がしたい

.....

その4

ケツ妹子マークII

………つてふざけてんのか

このマダオ（真面目に日本の将来が心配に成る程
ダメダメで

同じ空気を吸いたくない糞蟲
の略）が！！」

妹子は太子にかかと落としを御見舞いする

「ヘモグロビン！！！！」

太子は首まで地面にめり込まれた

「全く：そんなに摂政っぽい事したければちゃんと仕事をして下さい」

妹子はため息混じりに言う

「うっさい！

いいからまず私を助けてろ！！」

「はぁやれやれ」

妹子はしぶしぶ太子を引き抜く

「はぁ」

危うく草の栄養分になりかけた」

「植物にも負けるんだ……

ていうかなっちゃんばいいのに」

「妹子、お前ヒドイなあ………ま、それはそうと、これから私の
凄さをアピールするための作戦会議を開くぞ」

「いや、だから仕事をして下さいよ………っっていうか何かあ
ったんですか？」

太子が新しい事しようとする時は大体何かしらあるでしょう」

飛鳥一武道会の時も

乗馬大会の時も

富士山に登った時も

何かしら理由（大抵しょーもない理由）があった

聞いた所で呆れるだけだが万一、国を揺るがす事態だったら
と妹子は考え太子に尋ねる

「ああ、実は昨日、私、シンリンヨクに行ってたんだが」

「また行ってたんですか……ちゃんと仕事して下さいって」

「だから私が話してる時に横から茶々入れするな！！
このイモケンタウロス！！」

ズドワッ

「タピオカパン！！！！」

「で？それで？」

「妹子、お前、私仮にも聖徳太子だぞ

回し蹴りってお前……………」

「それはいいとして森林浴で何かあったんですか？」

「あーそれがってえ？」

妹子の対応に若干違和感を覚える太子だったが話を進める

「まあなんだ

森林浴の最中何人かの朝廷のお偉いさん達にばったり出会ってさあ
なんでも昨日はみんなで休暇を取って森林浴に行ってたらしいんだよ
だけど私、呼ばれてなかった……………」

「え！？太子も一応位は高いじゃないですか」

「うん……………何だか、馬子の話だと私は摂政といっても摂政っぽい
事してないからお呼ばれされなかったらしい」

「あああ、まあ妥当な判断ですね」

「……………（ずーん）」

「あの、太子

いきなりこの世の終わりの様な表情するの止めて下さい
えらく不気味で恐いです」

さすがに言い過ぎたなと思った妹子はフォローを入れる事にする

「まあ

ですがアンタだって一応これでも聖徳太子なんだし
いつものリストラサラリーマンレベルの生活を少し改めて

仕事の一つや二つちゃんとすれば認めくれる人も出来ますよ
だからその北斗真拳で絶命寸前のオッサンの様な顔しないで下さい
ただでさえ糞みたいな顔面が更に醜くなりますよ」

明らかに棘だらけのフォローをニコニコしながら言い放つ妹子はまさに世界最高レベルのドSに相応しかった

だか太子も凄い物で今の長台詞で復活する

「分かった……………そうだよな……………私、頑張ってみるよ」

「そのいきです、太子」

「……………だがその前に……………誰が糞みたいな顔面じゃ
……………」

太子はルノールロケットのごとく垂直に妹子に突撃する

「ぐはっ

今回も読めなかった……………」

んで妹子ん家

「よーっしっ!!」

会議室に着いたとこだし
これから会議を始める」

「いや会議室ってここ僕ん家ですよ」

「まあイナフ、太子だって遊びに来た訳じゃない
多少のワガママぐらいいいじゃないか」

太子に緊急召集されたフィッシュ竹中さんが妹子をなだめる

ちなみに竹中さん以外にも　ゴーレム吉田さん、他ノ事考輝さん、

調子丸、

そしてもう一人、見るからに太子と同レベルのオーラ（ダメオーラ）
をただよわせる男が太子の緊急召集により妹子の家に集められていた

「なんか…竹中さん、ちょっと湿ってて畳が濡れてきてるですけど」

「うむ………すまんかったなイナフ」

「いや、妹子です」

妹子と竹中さんの会話を太子が指摘する

「そこ！うるさいぞ！！」

聖徳太子の前なんだから私語は慎め！」

「やゝい、やゝい♪」

太子の指摘にダメオーラをまとった男が便乗する

「あの、太子

この太子レベルにウザイ人は誰ですか？」

「ウザイって言うな

うおいだまんえ

この人は宇甥田中恵くんだぞ

私の古い親友なんだ」

太子の古い親友？だからダメオーラ放ってんだ？

と妹子は思いながら挨拶すると中恵も元気良く挨拶する

「さーって本題に入るぞ、今日の議題は私を摂政と皆に認めさせるにはどうすればいいかだ

」

「はい」

と調子丸が挙手する

「お、意見か？いいぞいいぞ、んじゃ調子丸」

太子は調子丸を指す

「あの、トイレ貸して貰っていいですか？

お腹が痛いのと吐き気と寒気が……………」

「わーーーー妹子！早く調子丸をトイレに！！」

「摂政命令だ！ここでは出すな！早く連れてってやれ！妹子！！」

「りよ、了解！！！！」

妹子は調子丸をトイレに連れてった
いや運んでった

「大丈夫ー？調子丸君」

妹子はトイレに向かって言う

「あゝー！ー！ー無理です………ありがとうございます、妹子
さんは太子の所に」

妹子は調子丸を心配しつつ太子達の居る部屋に戻る

「（ー！ー＃）」

部屋に着いた妹子はもうなんか……マジでイラついた
何故？

太子と卍恵がそこらへんをメチャクチャにしてたからだ

「！イナフ、帰ったか……」

「竹中さん……これは？」

「いや、すまん

これを書かれると止めずらくて」

と竹中さんは太子がダンスに書いた竹中さんの落書きを指差す

「（竹中さん、以外にピュアなんだなあ）太子iiiiiiiiい卍恵さんんんんんんんん」

「あ、ヤバイ！！妹子がキレた！！
逃げるぞ

卍恵」

「逃がすか」

ガッ

妹子は太子と卍恵の肩を掴む

「調子乗ってすいませんっ」

「妹子！貴様！

いいじゃん別に！
って

すまーーーーん！！許してーーーー」

ドゴーーーーーン

「ラミレーーーーー」

太子は窓からすっ飛び、卍恵は天井にめり込んだ

「……………流石イワノフ

俺よりも豪快な拳」

吉田さんは妹子を称賛するが妹子にしてみれば嬉しくも何とも無く

「妹子です……………」

と言うしかなかった

「じゃあ会議を再開しよう」

腫れた右ほっぺを擦りながら太子は会議を再開させる

「んじゃ竹中さん、何かアイデアある？」

「うむ、町中の水という水を全て墨汁にする、なんてどうだろう」

「竹中さん、熱でもあるんですか？」

妹子は丁重にツツコム

「んーなになに

水という水を墨汁っ」と

「メモるな!!」

「んじや次、中恵」

太子は構わず卍恵を指名する

「え〜〜〜と
じゃ

朝廷内オールセーラー化計画
なんてどうだろう」

「どうだろうと言う前にお前という人間がどーなんだよ！お前変態だろ！！」

アレ?

なんかデジャブ？)

「なにに、セーラー化かあ……だが今ジャージだしなあ……
……よし、間を取ってブレザーで行こう」

「行くな――！――！――！――！――！――！――！――！――！――！日本をどうする気だああああ！！！！！」

太子と中恵さんの二人は混ぜるな危険である

「全く、もっと真面目に、これからの日本の政治について話し合い
ましょーよ」

「はいはい分かったよ、うるさいなあ」

「じゃあ考輝さん何かある？」

「作者さん連載小説あんのに何やってんだろ」

「他の事考えてる！！」

「びっくりしたくくく、吉田さんは意見ある？」

「うむ、太子の像なら作ってやるぞ」

「マジで！？いいじゃんそれ
作ろう作ろう！！」

太子大喜び

「いや政治的な事しましょう」

日曜日から土曜日まで休日にしよう

みんなでツチノコ探し

モアイ作り

「ただ今帰りましオゲロロロロ」

「「「「ぐああああああああああああああああああ」」「」」「」」

などとその後もうくな案が出なかった

「ゼエ……ゼエ……」

「ひゃい……ひゃい……」

「ヒーヒー」

「はあ……はあ……」

調子丸のゲ……オーロラの処理を終えた頃には妹子、調子丸は勿論、太子、卍恵も相当消耗していた

体力のある竹中さん、動じない吉田さん、ほかの事考えてる考輝それぞれスキルを持っている三人だけは平然としていた

「え」と

とりあえず今日はもう解散って事でいいかな……」

冷めた空気、残り少ない体力、重症の調子丸、解散にするには十分な理由だった

「まあ

アイディアいっぱい、ノートびっしりだし
ね、」

結局、太子の摂政アピールの会議はこれにてお開きになった

結局、大喜利やっただけで終わった……………

妹子はそんなことを思いながら部屋の片付けを始めた

数日後

散歩している妹子はなんかえらくキモイオッサン……………じゃ
なくて聖徳太子がうなだれてるのを発見した

「あれは……………」

太子？

何やってんだ？あのうんこ丸」

妹子が太子の元に行くと太子が飛び付いてきた

「ちくしよおおおおおおおおおおおお」

「ぎやああああああキモイ!!!!!!」

妹子は思わず太子にバックハンドブローをお見舞いした

「ポロロツカ!!」

やはり太子は吹っ飛ばされる

「あゝ虫酸が走る
どうしたんです？太子？」

「虫酸が走るって
私そんなにもアレか？」

「ああ、何か生理的に受け付けなくて」

「しょぼぼぼーん」

うざい……

そう思いながら妹子は太子の元に行く

「で、何かあったんですか太子？」

「ああ、先日みんなでアイデア出し合って、びっしりになったノートを馬子さんに見せたんだけど

『……………全く…太子もヒマだねえ

こんなもん作って

採用の訳ないだろう

今はそんなこといいから真面目に仕事をしなさい』
だってさ!!!!!!

却下だよ!!! 却下!!!

私、ちゃんと仕事してるのに!!!」

「してないでしょ」

「してるよ!

たまには」

「常にしろよ! 常に」

多分言っても無駄だろうな

と思いながらも妹子はツツコム

「そこまで言うなら分かったよ

これから前回の会議の続きをやるぞ!

まずは前回のメンバー6人を集めるぞ!!!」

「またやんのかよ!!!

ていうか6人?

7人じゃありませんでしたっけ?」

「は? 7人?

私、妹子、竹中さん、調子丸、吉田さん、考輝さん
6人じゃないか」

「え!?! そうでしたっけ?

何かもう一人居たような気が……………」

「大丈夫か？ 妹子？ 芋でも切らしておかしくなったか？」

「……………」

…いえ…僕の勘違いでしょう
すいません

でも、もうその会議には出ませんよ
前回で懲りたんで」

「んだよ!!」

来いよ!!

このポイズンポテトが!!」

「誰がポイズンポテトじゃ!!!!!!」

「ミケランジェロ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

妹子はまたしても太子に強烈な一撃を繰り出したのだった

天界

「何やってんだよ

この変態大王イカが」

頭から角の生えた青年が卍恵の首を絞めながら言う

「ヒエエエエエエエエ

ごめんなさいっ!!

たまには息抜きもいいじゃん!!」

「たまにはってテメーはたまにしか仕事してねーじゃねーか!!」

ズンッ

ズンッ

ズンッ

青年は瞬時に自分の爪を伸ばしその爪で卍恵を刺しまくる

「ぎゃあああああああ」

青年は数回刺し終えた後卍恵を降ろす

「で？」

オメーは一体実界……………それも飛鳥時代に何しにいったんだ？」

「……………えゝゝ何も？（ぴゅーーーーー（口笛））」

「惚けんじゃねー!!

ぜーーーーーんぶ観てたわ!!

勝手に歴史改竄企ててんじゃねーーーー!!」

青年は卍恵を殴り飛ばす

「くそみそー！ー！！」

卍恵は飛ばされた後殴られた箇所をなでなでと擦りながら言う

「だって

あの聖徳太子がセーラー服認めれば

その後の未来でもセーラー服の素晴らしさが伝えられて

鬼男くんだって私のセーラー服を撤去するの止めると思って……

……」

「お前は実界をどーするつもりだ！ー！！！！」

ズザザザザザザザザ

卍恵は青年の爪の餌食となった

(後書き)

制期間2ヶ月……………

ううーーーーーん

やっと投稿出来た

こんな駄作ですが

感想よろしくお願いします!!!!!!!!!!!!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4028s/>

仕事をしよう

2011年10月8日20時04分発行